

寝取られ濡ちやんの告白



成人向け

黒猫屋

僕は、世間で言うヘタレ男子です。

特にこれという信念もなく、またすぐに人の意見に流され、昔から陰の薄い存在した。身長も普通、成績も普通、顔も運動神経も普通、いや、中の下くらいだったかもしれませぬ。

そんな僕も恋をしました。

それは中学時代、長い黒髪に整った顔立ち、優しい性格、

男子だけでなく女子からも嫌いという人はいないくらい人気のある人でした。

彼女の名前は秋山滯さんといいます。

もちろん僕は彼女を遠くから見つめることしかできず、

告白なんて考えたこともありませんでした。

残念ながら、僕の恋は卒業とともに自分の胸の奥にしまうことになりました。

でも、先々週の同窓会のことです。

僕は、恋焦がれていた秋山滯さんに再会できました。

再会した彼女は、ずいぶん大人な雰囲気をもっていました。

中学のころは男の人を避けるような素振りをしていましたが、

同窓会では、そんなこともなく、男子とも笑顔で談笑をしていました。

彼女のそんな僕にも笑顔で話しかけてくれました。

僕の心拍は上がりました。

そして、僕の恋心はまだ続いているのだと確信しました。

昔、言えなかった気持ちを伝えよう、玉砕してもいい、そう思いながら同窓会の帰り

僕は彼女に中学時代に好きだったこと、

そして、その想いがまだ続いていることを告白しました。

・・・彼女からの返事は貰えませんでした。

正確には、返ってきたのは

「本当の私・・・あの少し考えさせて・・・」

という意味ありげな言葉でした。

そして、2週間後、僕宛てに彼女の手紙と一枚のDVDが送られてきました。

手紙には、彼女の手書きで

「これが本当の私です。ごめんなさい。」

と・・・。

僕は、一緒に送られてきたDVDを再生することにしました。

「うん、ちゅば、ちゅば、あふ、あふんっっっ
今日は、彼にっ、本当の私を教えたいっ、のっ、だからっ、もう、仕方ないなっ」
TVに映し出されたのは、秋山さんが僕の知らない男とキスをしている映像でした。
「これを観てるのは、僕らの滞りちゃんに告白した童貞チ○ポくんかな？」
カスれた男の声が僕に話しかけている。
彼女にキスをしている男とは別の男。

「童貞君にはちよっと刺激が強いかもしれないけど、最後までみるんだよ。
君が好きなのは滞りちゃんのエロエロなところを見せてあげるからね。
すぐにティッシュの用意をしてね」

彼女は男の上ののしかかり積極的に男の唇を求めていた。

ちゅ

ちゅ

ちゅ

「滞たん、カメラ気にしなくていいからね」

「うん、ちゅば・・・ちゅば・・・じゅる・・・じゅる・・・れろ、ちゅるちゅる・・・」

「そ、そうそう、精子出るところを舌でチロチロするの、ちよー気持ちいいっ
やっぱ、すげえ、フェラテク
さんさん、俺が教え込んだからな」

「おいおい、自慢すんなよ、俺たちだる、俺たち」

「そうだぜ、お前一人の手柄じゃなんだぜ」

三人で秋山さんをこんなにしたのかっ
僕は怒りのあまり歯ぎしりをしながらも、映像から目をはずすことができなくなっていた。



れろ
れろ
れろ

くちゅ

くちゅ

ちゅ

「でもよ、風俗でもこんなテク持ってる嬢はいないぜ、やっぱ滞たんのフェラチオ最中！
やべ、出ちやう、滞たん、いいよね、出してもいいよね」
男は、切なそうな声をだしながら、秋山さんに懇願した。

「出すよ、出すよ、滞たんの顔にふっかけるよ！」



プビュビュビュビュッ

耳障りな音と共に大量の白濁した精子が秋山さんの顔を汚した。
しかし、彼女は恍惚とした表情でその精子を舐め上げ
まだいさり立っている男のチ○コにじゃぶりつき、尿道に残る精子を吸い取っていた。

「湯ちゃん、パイプで十分ほぐしたから大丈夫だよ〜」
そういうと、男は、さっきまで
秋山さんの膣(なか)をさんざん堪能していたチ○コをア○ルにあてがい、
そして、彼女の下に潜り込んだもう一人の男は、
秋山さんの口を凌辱していたチ○コを秘部にあてがった。

二本の筒は、
同時に彼女の下半身の二つの肉壁を押しつけるようにググッとめぐりこんでいった。

あんっ

あんっ

あっ

ズブ
ズブ

ヌチャッ
ヌチャッ

「うっ、やっ、ダメっ、二本いつしよはっ、
すくっ、イッちやうから、ダメっ、なのっ」
秋山さんの懇願は受け入れられず、二人の男は、
タイミングを合わせる様に彼女の膣(なか)と直腸を弄んだ。
「おまのこことっ、お尻のっ、間がゴリゴリするっ、ダメ、何か来ちゃう」

あんっ

んっ

んんっ



「やべ、俺、出る！」
ア○ルを犯していた男の限界が急に近づいたらしく、
激しく腰をふり、少しでも快感を得ようとしていた。
「お尻だからいいよね、中で出すよ！」
ううっ」
「.....ふう.....」
男は満足げにチ○コを抜いた。
ア○ルからドロリと精液があふれだした。

秋山さんの思考は完全に性欲に支配されているようだった。目はとろんとし、男に奉仕することだけに集中していた。そして、その奉仕している男の男根は日本人の平均の倍の長さ、太さに加え彼女を満足させるに足りる硬さも持っていた。

「俺のチ○コ好きかい？」

「好きっ、大好きっ、この精子臭いのも好きっ！」

彼女は、夢中になって陰茎と陰のうをじゅわじゅわと舐めていた。

「これを見ている童貞チ○コが羨とどっちが羨ましい？」

彼女は一瞬、黙ってしまった。

僕のこと……思い出してくれたの……」

「澤ちゃん、ホントは中華の……の味が好きなんですよ」

男の声は、秋山さんをなだめる様に柔らかい口調で、しかし、有無を言わせない迫力を持っていた。

んぷっ

くちゅ

んぷっ

「はい……彼のことがまだ好きです」

「俺たちにすっかり肉奴隷の調教を受けたのにな……」

「じゃあ、お仕置きだね」

一生、澤ちゃんに俺のチ○コ、味あわせてあげないっ！」

「それは、それは……」

「お願いです。薄のおま○こ……」

「それだけっ！」

「私は、みんなの肉便器です。……」



ズブズブズブズブ
さっさまでの二人の愛よ
晴らかにすすむの流る男根が林山さんの腰をえぐるもぐりこんでいった。

ズンッ、ジュウッ、ズンッ、ジュウッ、ズンッ、ジュウッ、ズンッ、ジュウッ

男が腰を揺るたび
彼女の子宮口を押し広げるような音と
女が息を受け入れるために垂れ流す愛液が溢れ出す音が繰り返される。
「さあ、オムラに胸かっさ、童貞皮被りチ○ボ君に何か言っておげなさい、はら」

「んんっ、ご、ごめんなさいっっ、ごめんなさいっっ、
私っあなたのことがっすっ、好きでしたっ」
林山さんが僕の事を想っていてくれた。
彼女の目が涙で潤んでいるように見えた。

あっ♡
はっ
あっ♡

「でも、ごめんなさいっ、ごめんなさいっ、
男がより熱いまでチ○ボを挿れようとして、腰を彼女の尻に密着させようとしている。
「あ、ああんっ、感じちゃ、う、のっ、あっ、い、チ○ボに感じちゃ、う、のっ、」
極太チ○ボなしじゃ生かれないのっ」



「正常位で彼女は犯されてる。秋山さんはさっきの僕への告白は嘘だったかのように、男に身をのたわわしている。『あああふうう、あふう、あふう、カリが中で暴れてるっ子宮まで届いてるっゴサゴサするっ』」

あうっ

あんっ♥

やっ

ぬ、ちゃ

ぬ、ちゃ

ぬ、ちゃ

はっ

あんっ♥

「やっぱ、濡ちゃん、すっごくもも種たわギューギューに締めつけるし、マ○コが俺のチ○コに食い込んで放さねえしっ」男は彼女の中心臓々まで挿入の角度を変えたり、股を動かして快感を追求したりしてた。



僕は、いつの間にか、ガチガチに硬くなったチ○コを握りしめていた。
そして、テレビに映る彼女の恍惚とした唇にチ○コを押し付け、精液をぶちまけていた。



あとがき

みなさん、こんにちは。

もしくは初めまして、黒猫屋と申します。

この度は、黒猫屋の同人CG集(?)をご購入頂きありがとうございます。

今回は、「寝取られモノ」に挑戦しましたがどうでしたでしょうか、

ちゃんと濡ちゃんは寝取られてたでしょうか？(←オイラが言うなw

何はともあれ、みなさんに喜んで頂けたら幸いです。

今回は寝取られでしたが、他にも描きたいジャンル、

例えば今や御禁制になりつつあるロリッ子モノや凌辱モノ、ふたなり、獣姦など

色々ありますが、がんばって挑戦したいと思っています。

(Flashとかゲームとかも作りたいですね〜♪)

まだまだ画力や話、構成も拙いですが、日々精進していきたいです。

長文失礼しました。

では。

2010.09 黒猫屋